

N-SUBSTITUTED INDOLE DERIVATIVE, ITS PRODUCTIN AND INSECTICIDAL COMPOSITION WITH THE SAME AS ACTIVE INGREDIENT**Publication number:** JP6092935**Publication date:** 1994-04-05**Inventor:** HOTTA HIROKI; KAWADA SHUJI; MASUI AKIO;
WATABE TETSUO; KODAMA SEIICHIRO**Applicant:** NIPPON KAYAKU KK**Classification:**

- International: A01N43/38; A01N43/40; C07D209/30; C07D209/42;
C07D401/04; C07D209/42; A01N43/34; C07D209/00;
C07D401/00; (IPC1-7): C07D209/30; A01N43/38;
A01N43/40; C07D209/42; C07D401/04

- European:

Application number: JP19920269109 19920914**Priority number(s):** JP19920269109 19920914[Report a data error here](#)**Abstract of JP6092935**

PURPOSE: To provide a new compound having excellent insecticidal activity, useful as a controlling agent for noxious organisms in paddy fields, agricultural fields, orchards, forests, or environmental and hygienic circumstances, or as a parasite controlling agent for humans or animals. CONSTITUTION: The compound of formula I (X is CH, N or C-halogen; Y is H, alkyl, alkenyl, alkynyl, alkoxy, haloxy, CN, OH₂, etc.; R<1> is alkyl, haloalkyl, alkoxy, or haloalkoxy; R<2>-R<4> are each H, alkyl, alkenyl, alkynyl, halogen, CN, formyl, carboxyl, alkoxy carbonyl, alkyl carbonyl, NO₂, cyanato, etc.; m is 0-2; n is 0-4), e.g. 1-(3-chloro-5-trifluoromethylpyridine-2-yl)-3-(dichlorofluoromethylthio) indole. The compound of the formula I can be obtained by reaction of a compound of formula II with a sulfinyl halide of formula R<1> S-halogen to produce a compound of formula III, which is then made to react with a compound of formula IV (Z is halogen).

Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平6-92935

(43)公開日 平成6年(1994)4月5日

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	序内整理番号	F I	技術表示箇所
C 07 D 209/30		9284-4C		
A 01 N 43/38		8930-4H		
43/40	1 0 1 P	8930-4H		
C 07 D 209/42		9284-4C		
401/04	2 0 9	8829-4C		

審査請求 未請求 請求項の数 7(全 9 頁)

(21)出願番号	特願平4-269109	(71)出願人 000004086 日本化薬株式会社 東京都千代田区富士見1丁目11番2号
(22)出願日	平成4年(1992)9月14日	(72)発明者 堀田 博樹 埼玉県与野市上落合1090

(72)発明者 堀田 博樹 埼玉県与野市上落合1090
(72)発明者 川田 修司 埼玉県北足立郡伊奈町大字大針331-61
(72)発明者 植井 昭夫 埼玉県大宮市南中野1-14
(72)発明者 渡部 哲夫 埼玉県上尾市小敷谷大久保880-33
(72)発明者 児玉 聖一郎 埼玉県与野市上落合1039

(54)【発明の名称】 N置換インドール誘導体、その製造方法およびそれを有効成分とする殺虫組成物

(57)【要約】

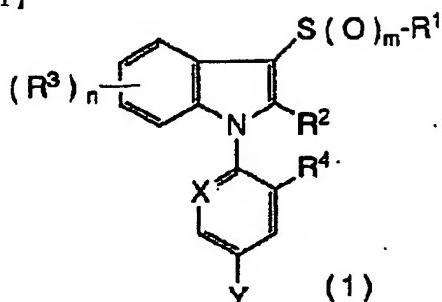
【構成】 ハロアルキルチオ基等を有するN置換インドール誘導体、その製造方法およびそれを有効成分とする殺虫組成物。

【効果】 この誘導体は、コナガ、ウンカなどに対し優れた殺虫効力を有し、水田、畑地、果樹園、森林または環境衛生場面における有害生物防除場面で有効である。

【特許請求の範囲】

【請求項1】一般式(1)

【化1】



10

[式中、XはCH、N、またはC—ハロゲン原子を示し；Yは水素原子、C₁—C₅アルキル基、C₂—C₅アルケニル基、C₂—C₅アルキニル基、アルコキシ基、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、C₁—C₅ハロアルキル基、C₁—C₅ハロアルコキシ基、C₂—C₅ハロアルケニル基またはC₂—C₅ハロアルキニル基を示し；R¹は、C₁—C₅アルキル基、C₁—C₅ハロアルキル基、C₁—C₅アルコキシ基またはC₁—C₅ハロアルコキシ基を示し；R²、R³、およびR⁴はそれぞれ独立に水素原子、C₁—C₅アルキル基、C₂—C₅アルケニル基、C₂—C₅アルキニル基、ハロゲン原子、シアノ基、ホルミル基、カルボキシル基、アルコキシカルボニル基、ハロアルコキシカルボニル基、アルキルカルボニル基、ハロアルキルカルボニル基、ニトロ基、シアナト基、チオシアナト基、C₁—C₅ハロアルキル基、C₁—C₅アルコキシ基、C₁—C₅ハロアルコキシ基、C₂—C₅ハロアルケニル基または—S(O)kR₆（ここで、kは0、1または2を示し、R₆は未置換のC₁—C₅アルキルまたは、同じもしくは異なる1つ以上のハロゲン原子で置換されているC₁—C₅アルキルを示す）を示し；mは0、1または2を示し；nは0、1、2、3または4を示す]で表わされる化合物。

【請求項2】一般式(1)において、XはNまたはC—ハロゲン原子を示し；YはC₁—C₅アルキル基、C₁—C₅ハロアルキル基、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基またはC₁—C₅ハロアルコキシ基を示し；R¹は、C₁—C₅アルキル基、C₁—C₅ハロアルキル基、C₁—C₅アルコキシ基またはC₁—C₅ハロアルコキシ基を示し；R₂、R₃およびR₄は、それぞれ独立に水素原子、C₁—C₅アルキル基、C₂—C₅アルケニル基、C₂—C₅アルキニル基、ハロゲン原子、シアノ基、カルボキシ基、アルコキシカルボニル基、ハロアルコキシカルボニル基、アルキルカルボニル基、ハロアルキルカルボニル基、ニトロ基、C₁—C₅ハロアルキル基、C₁—C₅アルコキシ基、C₁—C₅ハロアルコキシ基、C₂—C₅ハロアルケニル基を示し；mは

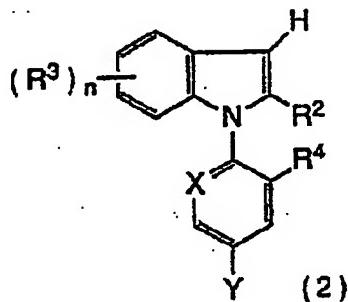
50

0、1または2を示し；nは0、1、2、3または4を

示す]で表わされる請求項1に記載の化合物。

【請求項3】一般式(2)

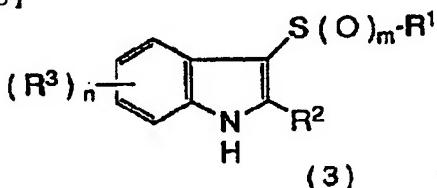
【化2】



[式中X、Y、R²—R⁴およびnは請求項1で定義したものと同一の意義を有する]で表わされる化合物。

【請求項4】一般式(3)

【化3】

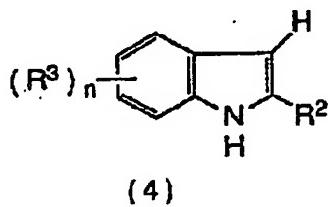


[式中R¹、R²、R³、nおよびmは請求項1で定義したものと同一の意義を有する]で表わされる化合物。

【請求項5】一般式(2)で表わされる化合物をハロゲン化スルフィニルR¹S—ハロゲン原子（式中、R¹はアルキルもしくはハロアルキルである）と有機溶媒中で必要により塩基の存在下に反応させることを特徴とする、前記一般式(1)の化合物の製造方法。

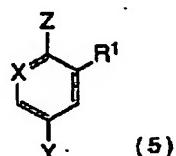
【請求項6】一般式(4)

【化4】



[式中R²、R³およびnは請求項1で定義した物と同一の意義を有する]で表わされる化合物をハロゲン化スルフィニルR¹S—ハロゲン原子（式中、R¹はアルキルまたはハロアルキルである）と有機溶媒中で必要により塩基の存在下に反応させて一般式(3)で表わされる中間体を生成させ、次いで塩基存在下で一般式(5)

【化5】



[式中Zはハロゲンを表わし、X、YおよびR¹は請求

項1で定義したものと同一の意義を有する]で表わされる化合物と反応させることを特徴とする、前記一般式

(1) の化合物の製造方法。

【請求項7】請求項1記載の一般式(1)で表される新規1-アリールおよび1-ピリジルインドール誘導体を有効成分として含有することを特徴とする殺虫組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、インドール類に属する新規化合物ならびにこれら化合物の製造用中間体、さらにこれらの化合物とその中間を製造するための方法に関するものであり、該誘導体は水田、畑地、果樹園、森林または環境衛生場面における殺虫剤として利用することができる。また、該誘導体は人又は動物を寄生虫の障害から保護するために寄生虫防除剤として利用することができる。

【0002】

【従来の技術】農薬活性を有するN置換インドール類は、米国特許出願第3290332号および日本特開昭5-151505号において記述されているが、この場合窒素原子上の置換基としてアリールおよびピリジル基は含まれておらず、また用途は殺虫剤ではなく殺菌剤である。

【0003】

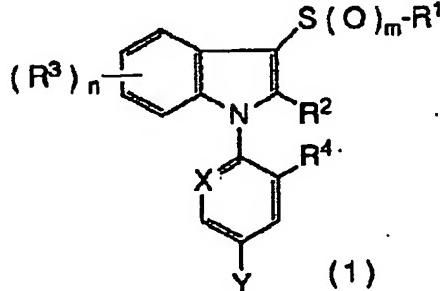
【発明が解決しようとする課題】水田、畑地、果樹園、森林、または環境衛生場面における有害生物防除場面で、より高い殺虫活性及び有益昆虫、環境等には害を及ぼさない性質を有し、かつ低毒性な化合物が要求されている。また、最近では公知の殺虫剤たとえば有機リン剤カーバメート剤、ピレスロイド剤等に対し抵抗性を示す害虫が増大し、防除が困難となってきており、新しいタイプの薬剤が要求されている。本発明は、有益昆虫、環境等には実質的に害を及ぼさず、低毒性で薬剤抵抗性害虫にも卓効を示す新しいタイプの殺虫性化合物、それらを製造するための中間化合物ならびにそれを有効成分とする殺虫組成物を提供することを目的としている。

【0004】

【課題を解決するための手段】上記目的を達成するために鋭意研究した結果、一般式(1)

【0005】

【化6】



[式中XはCH、N、またはC-ハロゲン原子を示し；Yは水素、C₁-C₆アルキル、C₂-C₆アルケニル基、C₂-C₆アルキニル基、アルコキシ基、ハロゲン、シアノ、ニトロ、C₁-C₆ハロアルキル、C₁-C₆ハロアルコキシ、C₂-C₆ハロアルケニルまたはC₂-C₆ハロアルキニルを示し；R¹は、アルキル、ハロアルキル、アルコキシまたはハロアルコキシを示し；R²、R³およびR⁴は、それぞれ独立に水素、C₁-C₆アルキル、C₂-C₆アルケニル基、C₂-C₆アルキニル基、ハロゲン、シアノ、ホルミル、カルボキシル、アルコキシカルボニル、ハロアルコキシカルボニル、アルキルカルボニル、ハロアルキルカルボニル、ニトロ、シアナト、チオシアナト、C₁-C₆ハロアルコキシ、C₂-C₆ハロアルケニルまたは-S(O)_kR⁵（ここで、kは0、1または2を示し、R⁵は未置換のC₁-C₆アルキルまたは、同一もしくは異なる1つ以上のハロゲン原子で置換されているC₁-C₆アルキルを示す）を示し；mは0、1または2を示し；nは0、1、2、3または4を示す]で表わされる新規N置換インドール誘導体がすぐれた殺虫活性を有することを見いだし本研究を完成するに至った。

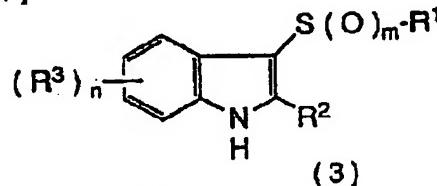
【0006】本発明の一般式(1)の化合物は以下の方法で製造することができる。

方法1

一般式(3)

【0007】

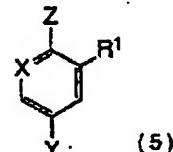
【化7】



[式中R¹-R³、mおよびnは前記と同じ意味を有する。]で表わされるインドール誘導体と一般式(5)

【0008】

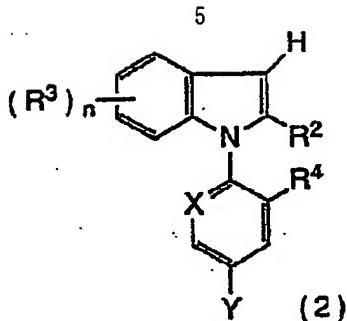
【化8】



[式中Zは、ハロゲンを示し、X、YおよびR¹は本文中前記と同じ意味を有する。]の化合物を塩基存在下で反応する事により、一般式(2)

【0009】

【化9】



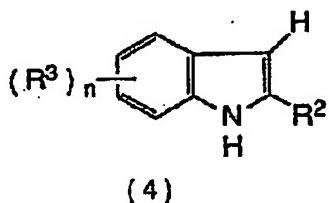
【式中X、Y、R² - R' およびnは本文中前記と同じ意味を有する。】の中間体を調製し、次いでハロゲン化スルフィニルR' S-ハロゲン原子（式中、R' はアルキルもしくはハロアルキルである）と有機溶媒中で必要により三級アミンの様な塩基の存在下に反応させることにより調製される。

【0010】方法2

一般式 (4)

【0011】

【化10】



【式中R² , R³ およびnは本文前記と同じ意味を有する。】で表わされるインドール誘導体とハロゲン化スルフィニルR' S-ハロゲン原子（式中、R' はアルキルもしくはハロアルキルである）と有機溶媒中で必要により三級アミンの様な塩基の存在下に反応させることにより一般式 (3) で表わされる中間体を調製し、次いで一般式 (5) の化合物を塩基存在下で反応する事により調製される。

【0012】反応は一般式 (4) の化合物と一般式 (5) の化合物または一般式 (3) の化合物と一般式 (5) の化合物を任意の割合で使用することができるが、好ましくは等モル比かほぼ等モル比で使用する。塩基としては例えば、水素化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化ナトリウムなどの無機塩基、トリエチルアミン、ピリジンなどの有機塩基を使用することができる。

【0013】トリエチルアミン、ピリジンなどの有機塩基を用いた場合は大過剰に用いて溶媒として使用することもできる。塩基の量は理論量もしくは過剰に用いることができるが、好ましくは理論量がそれにより1.0~5.0倍過剰な量を用いる。

【0014】溶媒としては反応物に対して不活性溶媒たとえばヘキサン、ヘプタンなどの脂肪族炭化水素類、ベンゼン、トルエン、キシレンなどの芳香族炭化水素類、クロロホルム、ジクロロメタン、クロロベンゼンなどのハロゲン化炭化水素類、ジェチルエーテル、テトラヒド

10

ロフランなどのエーテル類、N, N-ジメチルホルムアミドなどのアミド類、アセトニトリル、プロピオニトリルなどのニトリル類などが挙げられる。これらの混合溶媒及びこれらと水との混合溶媒を用いることができる。

【0015】反応は、-20℃から溶媒の沸点までの温度範囲で行なうことができるが好ましくは0℃~80℃の範囲である。一般式 (1) 、 (2) および (3) の化合物の製造時における反応混合物は充分な時間攪拌され通常の後処理たとえば抽出、水洗、乾燥、溶媒留去等の過程により目的物が回収される。簡単な溶媒洗いをするだけで充分な場合が多いが、必要があれば再結晶あるいはカラムクロマトグラフィーにより精製を行うことができる。

【0016】本発明の一般式 (1) の化合物を使用する場合、使用目的に応じてそのままかまたは効果を助長あるいは安定にするために農薬補助剤を混用して、農薬製造分野において一般に行なわれている方法により、粉剤、細粒剤、粒剤、水和剤、フロアブル剤、乳剤、マイクロカプセル剤、油剤、エゾール、加熱燻蒸剤（蚊取線香、電気蚊取など）、フォッキングなどの煙霧剤、非加熱燻蒸剤、毒餌などの任意の製剤形態の組成物にして使用できる。

【0017】これらの種々の製剤は実際の使用に際しては、直接そのまま使用するか、または水で所望の濃度に希釈して使用することができる。ここに言う農薬補助剤として担体（希釈剤）およびその他の補助剤たとえば展着剤、乳化剤、湿展剤、分散剤、固着剤、崩壊剤等をあげることができる。液体担体としては、トルエン、キシレンなどの芳香族炭化水素、ブタノール、オクタノール、グリコールなどのアルコール類、アセトン等のケトン類、ジメチルホルムアミド等のアミド類、ジメチルスルホキシド等のスルホキシド類、メチルナフタレン、シクロヘキサン、動植物油、脂肪酸、脂肪酸エステルなどまたは灯油、軽油等の石油分留物や水などがあげられる。

【0018】個体担体としてはクレー、カオリン、タルク、珪藻土、シリカ、炭酸カルシウム、モンモリロナイト、ペントナイト、長石、石英、アルミナ、鋸屑などがあげられる。

【0019】また乳化剤または分散剤としては通常界面活性剤が使用され、たとえば高級アルコール硫酸ナトリウム、ステアリルトリメチルアンモニウムクロライド、ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル、ラウリルベタインなどの陰イオン系界面活性剤、陽イオン系界面活性剤、非イオン系界面活性剤、両性イオン系界面活性剤があげられる。又、展着剤としてはポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル、ポリオキシエチレンラウリルエーテルなどがあげられ、湿展剤としてはポリオキシエチレンノニルフェニルエーテルジアルキルスルホサクシネートなどがあげられ、固着剤としてカルボキシメ

20

30

30

40

50

チルセルロース、ポリビニルアルコールなどがあげられ、崩壊剤としてはリグニンスルホン酸ナトリウム、ラウリル硫酸ナトリウムなどがあげられる。

【0020】さらにこれら本発明化合物は2種以上の配合使用によって、より優れた殺虫力を発現させることも可能であり、また他の生理活性物質、たとえばアレスリン、フタルスリン、パーメスリン、デカメスリン、フェンバレート、シクロプロトリンなどのピレスロイドおよび各種異性体、除虫菊エキス、DDVP、フェニトロチオン、ダイアジノン、テメホスなどの有機リン系殺虫剤、NAC、MTMC、BPMC、ピリマーなどのカーバメート系殺虫剤、その他の殺虫剤、殺ダニ剤あるいは殺菌剤、殺線虫剤、除草剤、植物生長調整剤、肥料、BT剤、昆虫ホルモン剤その他の農薬などと混合することによりさらに効力のすぐれた多目的組成物をつくることもでき、また相乗効果も期待できる。

【0021】さらに、たとえばピペロニルブトキサイド、サルホキサイド、サフロキサンなどのピレスロイド用共力剤として知られているものを加えることにより、この効力を数倍にすることもできる。また、本発明化合物は光、熱、酸化等に安定性が高いが、必要に応じ酸化防止剤あるいは、紫外線吸収剤、たとえばBHT、BHAのようなフェノール類、 α -ナフチルアミンなどのアリールアミン類あるいはベンゾフェノン系化合物類を安定剤として適宜加えることによって、より効果の安定した組成物を得ることができる。本発明組成物中における有効成分含有量は製剤形態、施用する方法その他の条件により異なり場合によっては有効成分化合物のみでよいが通常は0.2~9.5%（重量）好ましくは0.5~8.0%（重量）の範囲である。

【0022】本発明の組成物の使用量は剤形、施用する方法、時期、その他の条件によって変るが、農園芸用剤、森林防害虫用剤及び牧野害虫用剤は通常10アール当たり有効成分量で10~300g、好ましくは15~200gが使用され、衛生防害虫用剤は通常1m²当たり有効成分量で2~200mg、好ましくは5~100mgが使用される。たとえば粉剤は10アールあたり有効成分で15~120g、粒剤は有効成分で30~240g、また乳剤、水和剤は有効成分で40~250gの範囲である。しかしながら特別の場合には、これらの範囲を越えることが、または下まわることが可能であり、また時には必要でさえある。

【0023】また、寄生虫の防除のために、本発明の一般式（1）の化合物を使用する場合、体重につき、0.1~200mg/kgに相当する投与量で用いることができる。与えられた状態に対する正確な投与量は、日常的に決定することができ、種々の因子、たとえば、用いられる物質、寄生虫の種類、用いられる配合及び寄生虫にかかったヒトあるいは動物の状態に依存する。

【0024】本発明の殺虫組成物の適用できる具体的な

害虫名を挙げる。半翅目 [Hemiptera] からたとえばツマグロヨコバイ (*Nephrotettix cincticeps*)、セジロウンカ (*Sogatella furcifera*)、トビイロウンカ (*Nila parvata lugens*)、ヒメトビウンカ (*Laodelphax striatellus*)、ホソヘリカメムシ (*Riptortus clavatus*)、ミナミアオカメムシ (*Nezara viridula*)、ナシグンバイ (*Stephanitis nashi*)、

【0025】オニツツコナジラミ (*Trialeurodes vaporariorum*)、ワタアブラムシ (*Aphis gossypii*)、モモアカアブラムシ (*Myzus persicae*)、ヤノカネカイガラムシ (*Unaspis y-anonensis*)、鱗翅目 [Lepidopters] からたとえばキンモンホソガ (*Phyllonorycter ringoneilla*)、コナガ (*Plutella xylostella*)、ワタミガ (*Promalactis inonisema*)

コカクモンハマキ (*Adoxophyes orana*)、マメシンクイガ (*Leguminivora glycinnivorella*)、コブノマイガ (*Cnaphalocrocis medinalis*)、ニカマイガ (*Chilo suppressalis*)、アワノマイガ (*Ostrinia furnacalis*)、ヨトウガ (*Mamestra brassicae*)、アワヨトウ (*Pseudaletia separata*)、

【0026】ハスモンヨトウ (*spodoptera litura*)、イネツトムシ (*Parnara guttata*)、モンシロチョウ (*Pieris rapae crucivora*)、ヘリオチス (*Heliothis spp.*)、ヤガ (*Agrotis spp.*)、鞘翅目 [Coleoptera] からたとえばドウガネイブイ (*Anomala cuprea*)、マメコガネ (*Popillia japonica*)、イネゾウムシ (*Echinocnemus soqameus*)、イネミズゾウムシ (*Lissorhoptrus oryzophilus*)、

【0027】イネドロオイムシ (*Oulema oryzae*)、ヒメマルカツオブシムシ (*Anthrenus verbasicus*)、コクヌスト (*Tenebroides mauritanicus*)、コクゾウムシ (*Sitophilus zeamis*)、ニジュウヤホシテントウ (*Henosepilachna vigintioctopunctata*)、アズキゾウムシ (*Callosobruchus chinensis*)、マツノマダラカミキリ (*Monochamus alternatus*)、

【0028】ウリハムシ (*Aulacophora femoralis*)、レプチノタルサ・デセムリネアタ (*Leptiontarsa decemlineata*)、フェドン・コクレアリアエ (*Phaedon cochlearias*)、ジアプロチカ (*Diabrotica spp.*)、膜翅目 [Hymenoptera] として、たとえばカブラハバチ (*Athalia rosaejaponensis*)、ルリチュウレンジハバチ (*Argesimilis*) 双翅目 [Diptera] としてはたとえばネッタイイエカ (*Culex pipiens fatigans*)、ネッタイシマカ (*Aedes aegypti*)、ダイズサヤタマバエ (*Asphondylls spp.*)、タネバエ (*Hylemyaplatura*)、

【0029】イエバエ (*Musca domestic a vicina*)、ウリミバエ (*Dacus cucurbitae*)、イネハモグリバエ (*Agromyz aoryzae*)、キンバエ (*Lucllia spp.*) 隠翅目 [Aphaniptera] としてヒトノミ (*Pulex irritans*)、ケオブスネズミノミ (*Xenopsylla cheopis*)、イヌノミ (*Ctenocephalides canis*)、総翅目 [Thysanoptera] として

病名

Bilharziosis 又は
Schistosomiasis

Ancylostomiasis

Ascariasis

【0034】

Filariasis 又は
elephantiasis

Onchoceriasis 又は
river blindness
Loiasis

【0035】

【実例例】以下に実施例をあげて本発明を説明するが、本発明はこれらのみに限定されるものではない。

【0036】合成例1

1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル) インドールの合成；インドール2.00gをジメチルホルムアミド20mlに溶解し、氷冷、窒素気

* 【0030】チャノキイロアザミウマ (*Scirtothrips dorsalis*)、ネギアザミウマ (*T hrips tabaci*)、ミナミキイロアザミウマ (*Thrips palmi*)、イネアザミウマ (*B ailiothrips biformis*)、シラミ目 [*Anoplura*] として、たとえばコロモジラミ (*Pediculus humanus corporis*)、ケジラミ (*P-thirus pubis*)、

【0031】チャタテムシ目 [*Psocoptera*] として、たとえばコチャタテ (*Trogium pulsatorium*)、ヒラタチャタテ (*Liposcelis bostrychophilus*)、直翅目 [Orthoptera] としてケラ (*Gryllotalpa africana*)、トノサマバッタ (*Locusta migratoria*)、コバネイナゴ (*Oxya ye-zoensis*)、チャバネゴキブリ (*Blattella germanica*) クロゴキブリ (*Periplaneta fuliginea*)。

【0032】また、本発明の殺虫組成物が適用できるヒトを苦しめる最も重要な寄生虫及びそれによる病気を次に要約するが、これらに限定されるものではない。

【0033】

生物

Schistosoma mansoni
S. Japonicum
S. Haematobium
(住血吸虫、吸虫)

Necator americanus,
Ancylostoma duodenale
(鉤虫、線虫)
Ascaris lumbricoides (回虫、線虫)

Wuchereria bancrofti
Brugia malayi
(線虫)

Onchocerca volvulus (線虫)
Loa loa
(眼糸状虫、線虫)

流下で水素化ナトリウム (60%) 0.69g を加え、30分攪拌した後、4mlのジメチルホルムアミドに溶解した2,3-ジクロロ-5-(トリフルオロメチル)ピリジン3.70gを氷冷下に滴下した。滴下終了後60℃まで加熱しその温度で2.5時間攪拌した。

【0037】室温に戻した後水中に注ぎ、酢酸エチルにて抽出した。得られた酢酸エチル層を水洗し、無水硫酸

11

マグネシウム上で乾燥し、減圧下で濃縮した。残留物をカラムクロマトグラフィー（シリカゲル、溶出液：n-ヘキサン／酢酸エチル=30/1）で精製して目的の1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル)インドールを4.85g（収率95%）を得た。

mp 52-53°C

【0038】合成例2

1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル)-3-(ジクロロフルオロメチルチオ)インドールの合成；1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル)インドール1.00gを塩化メチレン10mlに溶解し、ピリジン0.26ml加える。その溶液に氷冷下でジクロロフルオロメタンスルフェニルクロライド1.20gを滴下し、室温で4時間攪拌した。

【0039】溶媒を減圧下に留去し、残留物をカラムクロマトグラフィー（シリカゲル、溶出液n-ヘキサン）で精製して目的の1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル)-3-(ジクロロフルオロメチルチオ)インドールを1.38g（収率95%）を得た。mp 101-104°C

【0040】合成例3

3-(ジクロロフルオロメチルチオ)-5-フルオロインドールの合成；5-フルオロインドール1.00gを10mlの塩化メチレンに溶解し、ピリジン0.7ml加た後、氷冷下で10mlの塩化メチレンに溶解したジクロロフルオロメタンスルフェニルクロライド1.5gを滴下し室温で2時間反応した。酢酸エチル100mlおよびn-ヘキサン100mlを加え有機層を10%塩酸水溶液で2回、さらに水で1回洗浄した。

【0041】得られた有機層を無水硫酸マグネシウムで乾燥した後溶媒を減圧下に留去し目的の3-(ジクロロフルオロメチルチオ)-5-フルオロインドールを1.8g（収率91%）を得た。

【0042】合成例4

12

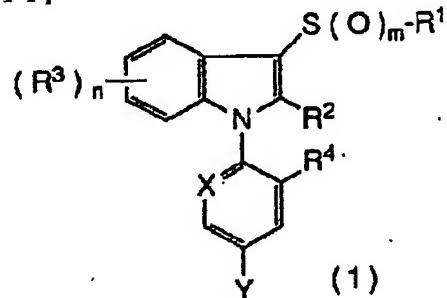
* 1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル)-3-(ジクロロフルオロメチルチオ)-5-フルオロインドールの合成；3-(ジクロロフルオロメチルチオ)-5-フルオロインドール0.6gをジメチルホルムアミド15mlに溶解し、氷冷、窒素気流下で水素化ナトリウム（60%）0.1gを加え、30分攪拌した後、2mlのジメチルホルムアミドに溶解した2,3-ジクロロ-5-(トリフルオロメチル)ピリジン0.5gを氷冷下に滴下した。

10 【0043】滴下終了後100°Cまで加熱し、その温度で3時間攪拌した。室温に戻した後、水中に注ぎ酢酸エチル100mlおよびn-ヘキサン100mlの混合溶媒で抽出した。得られた有機層を10%塩酸及び水で洗浄し、無水硫酸マグネシウム上で乾燥し、減圧下で濃縮した。残留物をカラムクロマトグラフィー（シリカゲル、溶出液n-ヘキサン／酢酸エチル=30/1）で精製して目的の1-(3-クロロ-5-トリフルオロメチルピリジン-2-イル)-3-(ジクロロフルオロメチルチオ)-5-フルオロインドールを0.6g（収率60%）を得た。mp 107-108°C

20 【0044】次に本発明に係る一般式（1）で表わされる化合物の代表例を表1に示す。

【0045】

【化11】



30

【0046】

【表1】

表1-A

No.	X	Y	m	R ¹	R ²	R ³	R ⁴
1	N	CF ₃	0	CCl ₂	F	H	C1
2	C-C1	CF ₃	0	CCl ₂	F	H	5-C1
3	N	CF ₃	0	CCl ₂	F	H	5-CN
4	N	CF ₃	0	CCl ₂	F	H	5-F
5	N	CF ₃	0	CCl ₂	F	H	5-OMe
6	N	CF ₃	0	CCl ₂	F	Me	C1

(8)

特開平6-92935

13							14
7	C-C1	CF ₃	0	CCl ₂	F H	H	C1
8	C-C1	C1	0	CCl ₂	F H	H	C1
9	C-C1	CF ₃	1	CCl ₂	H	H	C1
10	C-C1	CF ₃	2	CCl ₂	H	H	C1
11	N	CF ₃	0	CCl ₂	F H	6-C1	C1
12	N	CF ₃	0	CCl ₂	F H	4-C1	C1
13	C-C1	CF ₃	0	CCl ₂	H	H	C1

【0047】

表1-B (表1-Aの横書き)

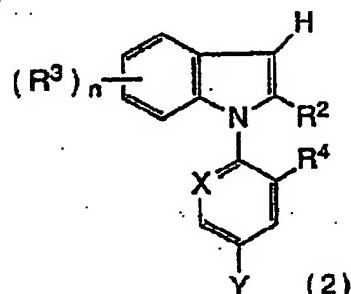
*る化合物の代表例を表2に示す。

【0049】

【化12】

No. mp (°C)
(屈折率nD 25)

1	101-104	20
2	95-98	
3	127-130	
4	107-108	
5	132-135	
6	92-94	
7	(1. 5851)	
8		【0050】
9		【表2】
10		
11		30
12		
13		



【0048】次に本発明に係る一般式(2)で表わされ*

表2

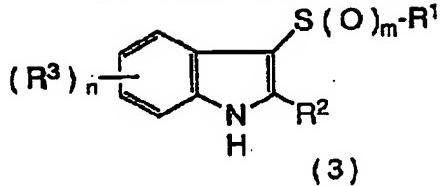
No.	X	Y	R ₂	R ₃	R ₄	mp (°C) (屈折率nD 25)
14	C-C1	CF ₃	H	H	C1	(1. 5851)
15	N	CF ₃	H	H	C1	52-53
16	C-C1	CF ₃	H	5-C1	C1	96-97
17	N	CF ₃	H	5-MeO	C1	(1. 5763)
18	N	CF ₃	Me	H	C1	115-118

【0051】次に本発明に係る一般式(3)で表わされ
る化合物の代表例を表3に示す。

【0052】

【化13】

※



【0053】

【表3】

表3

No.	m	R ¹	R ²
19	0	CCl ₂ F	H
20	0	CCl ₂ F	H

【0054】次に殺虫組成物を製剤例を用いて具体的に説明する。

製剤例1. 乳剤

化合物番号1の化合物20部にキシレンーメチルナフタレンの混合液6.5部を加え溶解し、次いでこれにアルキルフェノール酸化エチレン縮合物とアルキルベンゼンスルホン酸カルシウムの混合物(8:2)1.5部を混合して乳剤とした。本剤は水で希釈し散布液として使用する。

【0055】製剤例2. 水和剤

化合物番号1の化合物20部にカオリン3.5部、クレ3.0部、珪藻土7.5部を混合し、さらにラウエン酸ソーダとジナフチルメタンスルホン酸ナトリウムの混合物(1:1)7.5部を混合して微粉碎して粉剤を得た。

本剤は水で希釈し散布液として使用する。

【0056】製剤例3. 粉剤

化合物番号8の化合物1部にタルクと炭酸カルシウムの混合物(1:1)9.7部を加え混合磨碎して充分均等に分散配合した後、さらに無水珪酸2部を添加し、混合粉碎し粉剤とした。本剤はこのまま散布して使用する。

【0057】製剤例4. 粒剤

化合物番号8の化合物2部をベントナイト微粉末4.8部、タルク4.8部、リグニンスルホン酸ナトリウム2部と混合した後、水を加え均等になるまで混練する。次に射出成型機を通して造粒し、整粒機、乾燥機筒を通してにより粒径0.6~1mmの粒剤とした。本剤は直接水田面および土壤面に散粒して使用する。

【0058】製剤例5. 油剤

化合物番号1の化合物0.1部にピペロニルブトキサイド0.5部を加え白灯油に溶解し、全体を100部とし、油剤を得た。本剤はこのまま使用する。次に本発明に係る一般式(1)で表わされる化合物の生物効果を試験例により具体的に説明する。

【0059】試験例1. コナガに対する効果(茎葉浸漬法)

本発明化合物の20%水和剤あるいは20%乳剤を製剤例1および2に従って製造し、供試薬剤とした。

試験方法: キャベツ本葉10枚程度に生育したキャベツの中位葉を切りとり、各供試薬剤の有効成分が200ppmになるように水で希釈した処理液に20秒間浸漬した。風乾後、径9cmのプラスチック容器に入れ、コナガ3令幼虫10頭を放虫した。容器には小穴を5~6ヶ所あけたふたをして、25℃の低温室内に静置した。処

30

R ³	m p (°C)
5-F	
5-CN	

理、放虫してから4日後に生死虫数を調査し、死虫率を算出した。結果は2連の平均値で表4に示した。

【0060】

【表4】
表4

供試化合物	死虫率(%)
1	100
2	90
3	100
4	100
5	100
6	100
7	100

【0061】試験例2. トビイロウンカに対する効果
本発明化合物の20%水和剤あるいは20%乳剤を製剤例1および2に従って製造し、供試薬剤とした。

試験方法: 3~4葉期のイネ8本を1株として、各供試薬剤の有効成分が200ppmになるように水で希釈した処理液に20秒間浸漬した。風乾後、直径4.5cm、高さ15cmのガラス円筒に入れ、これにトビイロウンカの3令幼虫10頭を放虫し、処理6日後に生死虫数を調査し、死虫率を算出した。結果は2連の平均値で表5に示した。

【0062】

【表5】
表5

供試化合物	死虫率(%)
1	100
2	100
3	50
4	100
5	100
6	100
7	100

【0063】

【発明の効果】本発明は、以上実施例をあげて説明した
よう構成されているので、以下に記載されるような効
果を奏する。本発明のN置換インドール誘導体は、水
田、畠地、果樹園、森林または環境衛生場面における有
害生物防除場面で有効である。

40